

# 三徳山海老谷発掘調査報告書

農用地有効利用モデル集落整備事業  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1993・3

鳥取県東伯郡三朝町教育委員会



## 序 文

三徳山は、約1,000年の歴史を有し、わが国の修験道の山として貴重な文化財を多く保有しており、指定地域は東西南北ともに3kmに及びます。

この報告書は、三徳山海老谷地区農用地有効利用モデル集落整備事業の実施に係る事前調査で、周辺地域は尼寺が存在したとも伝えられており、発掘調査をした記録であります。

調査結果では、若干の遺物が出土しているものの、確かな包含層、明瞭な遺構は検出されませんでした。

調査につきましては、鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センターのご指導とご支援をいただきました。調査員には日野琢郎氏にお願いし、また町文化財保護調査委員の吉田芳之氏に協力を得ながら、師走の吹雪く中、全力を尽して調査いただき無事終わる事ができました。

実際に調査にご協力いただきました地元土地所有者の方々はじめ、関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成5年3月

鳥取県東伯郡三朝町教育委員会

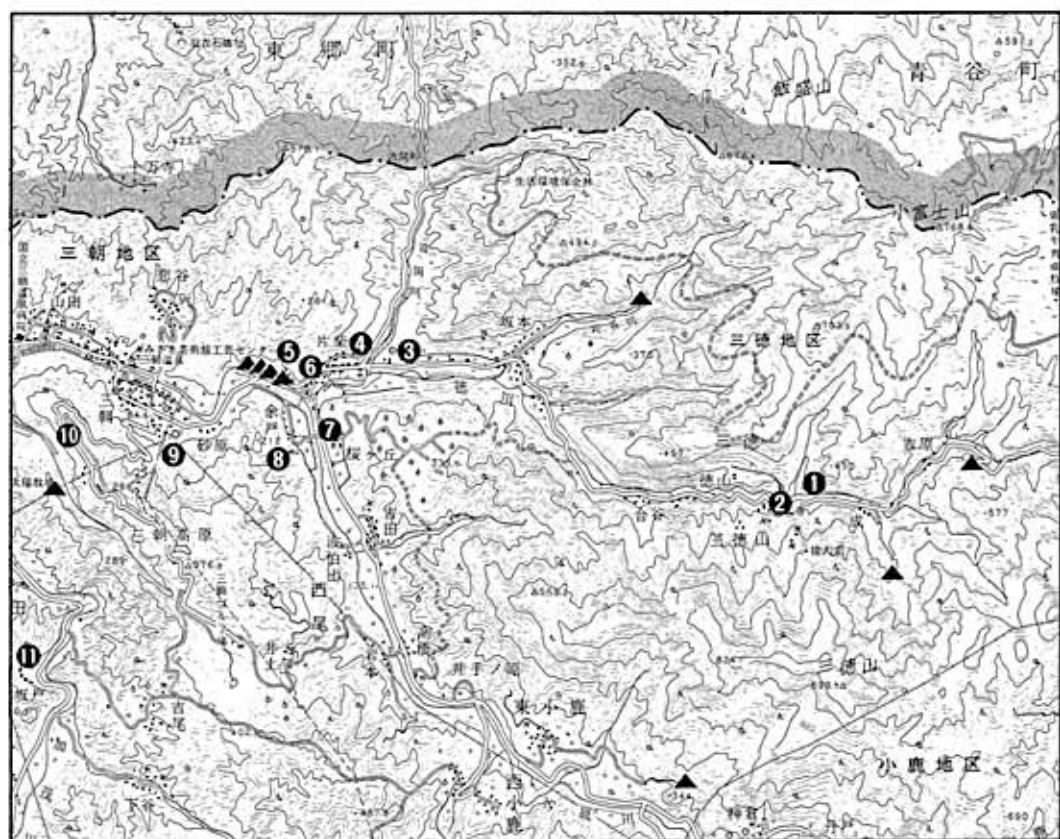
教育長 福 本 貞 夫

## 例 言

1. この報告書は、三朝町教育委員会が三徳山海老谷地区農用地有効利用モデル集落整備事業の、事前調査のための発掘記録である。
2. 調査関係者
  - 団 長 福本貞夫（三朝町教育委員会教育長）
  - 調査指導 鳥取県教育委員会文化課  
鳥取県埋蔵文化財センター
  - 調 査 員 日野琢郎（鳥取県文化財保護指導委員）  
吉田芳之（鳥取県文化財保護指導委員・三朝町文化財保護調査委員）
  - 事 務 局 谷川一寿（三朝町教育委員会生涯学習課長）  
長安節子（三朝町教育委員会生涯学習課係長）
3. 本書の執筆は、Ⅰは長安、Ⅱは吉田、Ⅲ・Ⅵは日野が担当した。
4. 出土遺物・図面・写真は、三朝町教育委員会が保管している。

# 目 次

I. 発掘調査に至る経過	1
II. 位置と環境・歴史	1～2
III. 調査の概要	3～10
IV. まとめ	11
第1図. 調査地周辺遺跡図	0
第2図. 調査地周辺地形図	3
第3図. 各トレンチ平面図・断面図	5
第4図. 出土遺物1	6
第5図. 出土遺物2	9
図版1. 調査地遠景・近景	13
図版2. 各トレンチ	14
図版3. 出土遺物	15
図版4. 出土遺物	16



第1図 調査地周辺遺跡図

- |            |          |          |
|------------|----------|----------|
| ① 海老谷調査地   | ⑤ 瀬助谷遺跡  | ⑨ 砂原古墳群  |
| ② 史跡・名勝三徳山 | ⑥ 片柴古墳群  | ⑩ 穴谷遺跡   |
| ③ 沖ノ戸古墳群   | ⑦ 桜ヶ丘古墳群 | ⑪ 坂戸古墳群  |
| ④ 曲り田遺跡    | ⑧ 余戸古墳群  | ▲ 製鉄関連遺跡 |

## I. 発掘調査に至る経過

本町は、平成5年度に農用地有効利用モデル集落整備事業として、三徳山海老谷地区のほ場整備事業を計画した。工事は、田の丘陵部の約3,000㎡を削って埋め、約19,000㎡のほ場整備を行う事業である。

その位置は、三徳川右岸の投入堂を望む河岸段丘で、周辺地域は尼寺の存在も伝えられ、工事によって削平される部分を事前に発掘調査し、記録することになった。

そこで、三朝町教育委員会は平成4年12月14日から17日まで試掘調査を実施した。

## II. 位置と環境・歴史

三徳山地域は、鳥取県の中部三朝温泉から東方約6.1kmの山間部にあり、三徳川に沿って県道鳥取鹿野倉吉線が通じ往古より、鹿野往来として山陰の要路であった。

三徳山を中心に、昭和9年国の名勝史跡として指定を受け、昭和29年に「三朝東郷湖県立公園」として指定されている。

東は、俵原地区より佐谷峠付近（660m）で鹿野町に接し、西は三徳川の流れに沿ってわずかな耕地と集落が点在している。南は、小鹿地域との境界となる陵線で最高峰の（三徳山899.7m）中腹には、国宝の投入堂（550m）がある。北は、青谷町に接し境界には（688m）の尾根が連なっている。

地質は三朝層群と呼ばれ、火山砕屑岩類・玄武岩類・安山岩類の順に層序を作っている。安山岩は、やゝ浸食されてはいるが原形をほぼとどめている。標高約660m以下の凝灰質角礫岩部分は、浸食が進行して深い溪谷を作っている。

位置は、東経134度、北緯35.2度になる。

北側の通称千軒原には、風穴もあり夏期でも涼風が絶えず出ている。一方植物では、いろいろ貴重な植物もあるが、特に変わった桜があり地元では通称「三徳桜」と呼び、大切に保護されている。

このたび、水田のほ場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が行われた。

その場所は、三徳川右岸で投入堂遙拝所北側の山麓で、地元では通称「シャアール」と呼ばれている。標高280mくらいで、段丘状の水田が谷沿いにひらかれ現在も耕作されている。

伯耆民談記によれば、「山の伝に曰、人王八代孝靈帝の御宇によりの山号有、42代

文武天皇の御宇、慶雲三丙内午の歳、役ノ優婆塞白雲峻嶺を擧ちて、あらたに神窟を開き、子守・勝手・蔵王三所をあん置す。52代仁明天皇嘉祥2年、釈ノ慈覚大神に神勅有て、刹柱を建て釈迦・弥陀・大日の三仏を安置して浄土院美徳山三仏寺と号すとある。

(中 略)

「往古の坊構は、今の寺ある向ふの山なり、山門の跡と云ふ処に大なる石あり、此地を九曜千軒と称す、往古よりハ、左に見ゆる山隴なり」と記されている。

### 三徳山の文化財

#### 一、国指定文化財

1. 国宝／三徳山三仏寺奥の院・投入堂…明治37年2月18日指定
2. 国宝／三徳山三仏寺寺奥の院・投入堂棟札…昭和52年6月27日指定
3. 重要文化財／三仏寺納経堂…明治37年2月18日指定
4. ♪ /三仏寺文殊堂…明治37年2月18日指定
5. ♪ /三仏寺地藏堂…明治37年2月18日指定
6. ♪ /木造蔵王権現立像…明治37年2月18日指定
7. ♪ /木造蔵王権現立像六軀…大正9年4月15日指定
8. ♪ /木造十一面観音立像…大正9年4月15日指定
9. ♪ /銅鏡(鸚鵡華文鏡)…明治37年2月18日指定
10. 名勝及び天然記念物／三徳山…昭和9年7月7日指定

#### 二、県指定文化財

1. 保護文化財／木造狛犬一对(三仏寺奥の院)…昭和62年12月25日指定

#### 三、町指定文化財

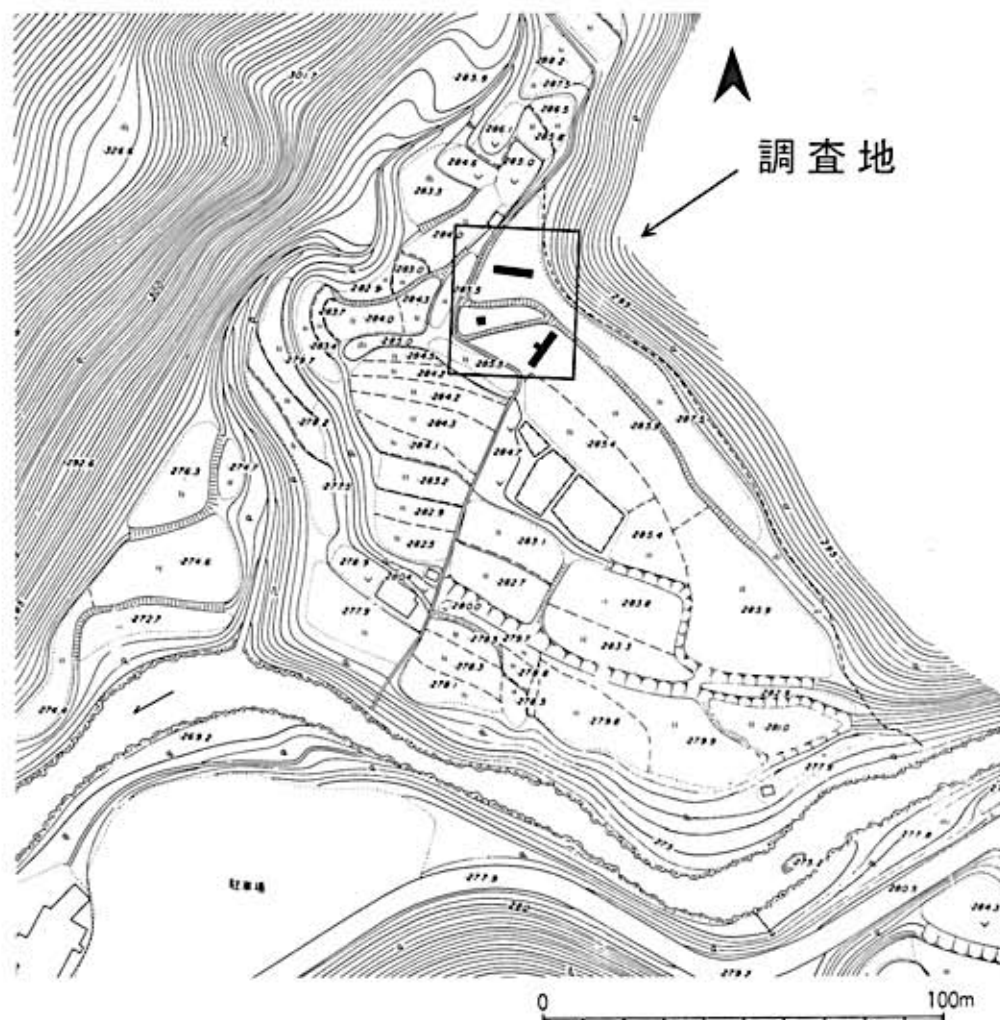
1. 保護文化財／三仏寺観音堂…昭和50年10月13日指定
2. ♪ /三仏寺鐘撞堂…昭和50年10月13日指定
3. ♪ /三仏寺不動堂…昭和50年10月13日指定
4. ♪ /三仏寺元結掛堂…昭和50年10月13日指定
5. ♪ /三仏寺十一面観音堂…昭和50年10月13日指定
6. ♪ /三仏寺写経…昭和50年10月13日指定
7. ♪ /男神・女神座像…昭和63年10月1日指定
8. ♪ /誕生仏(三仏寺)…昭和63年10月1日指定
9. ♪ /三仏寺本堂俳諧額…昭和63年10月1日指定
10. ♪ /宮本包則 刀剣(三仏寺)…昭和63年10月1日指定
11. 名勝／正善院庭園…昭和63年10月1日指定



### Ⅲ．調査の概要

調査地は、三徳川の中流右岸で、流れを隔てて投入堂のある三徳山の北面と相対する位置にある。地形は標高700m級の尾根筋に三方を囲まれ、約1kmを南流する海老谷小流の最下流域で、標高285mあたりの傾斜地に展開する水田地内にある。

中央部には谷より水を引いて養魚池が設置されており、一部は樹園地（水田転作の山椒）となっている。全体に小規模な水田が階段状に造成されており、山間部の狭い谷間に存在する水田の典型的な形態となっている。



第2図 調査地周辺地形図

### 1. 第1トレンチ (10×2 m)

第1トレンチを設定したほ場は、この地区では最上位にあって、山裾をとり巻く形で細長く伸びており、西側の一部には山椒が植栽されている。

水田の耕作土 (16~18cm) の下には床土 (敷土) 約4 cmがあり、水田特有の還元鉄の銹色が融着している。床土を除いた段階で、地山とみられる大小の角礫を含む黄褐色粘質土の硬い層が、北側の大部分を占める。南側は傾いて低くなり、砂質や河床礫を多く含む埋土によって整地されている。トレンチ南東部の中央に山石の並ぶ列があり、その南側は一段低くなる。砂質の多い第4層に続いて木炭と遺物の含まれる第5層となる。

現在の水田が造成される以前は、南東側が段差によって低くなる地表面が形成されていたものとみられる。

### 2. 第2トレンチ (2×2 m)

第2トレンチは、第1トレンチに続く一段下で三角形の小さいほ場である。ここも山椒が植栽されている。過去にほ場の統合整理 (くぼだおし) または再開田が行なわれたとみられ、耕作土と床土が2セット重なっている。その下は角礫を含む黄褐色粘質土層 (地山層) である。下段の耕作土内には、わずかに川擦れの認められる大小の礫が混入しているところから、洪水等による土石の流入があったものと推測される。

出土した遺物は2点であったが、染付の磁器は中位層、焼締めの陶器は下位層より検出された。

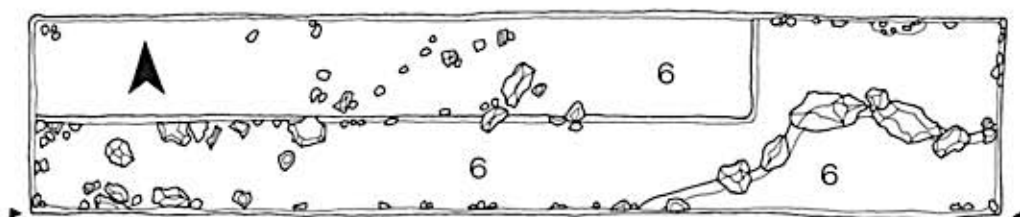
### 3. 第3トレンチ (10×2 m)

第3トレンチのほ場は、西側では第2トレンチに続く次の段で、南東側では第1トレンチ直下の段となる。この地区では最大で中央部の幅約15m、長さ120 mに及ぶ、過去に何回か「くぼだおし」の行なわれたことが、所有者によって明らかにされている。

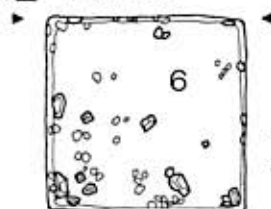
床土を除去した直下の中央部を、横断する形で数個の山石の並びが検出された、西側を一部拡張して試掘を行ったが、その状況からみて旧水田の畦に伴う石積み跡と判断するのが適当であった。

この石の列を境にして、山側は水田床土の直下は地山層であり、谷側では一段低くなっていたが、床土より下までの整地に使用されている埋土は、耕作土とほぼ同質であり、その中には少量の礫と木炭が混入しており、鉄釘をはじめ遺物が多く含まれていた。

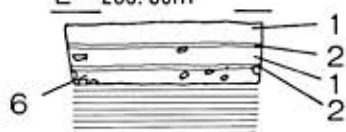
### 第1 トレンチ



### 第2 トレンチ

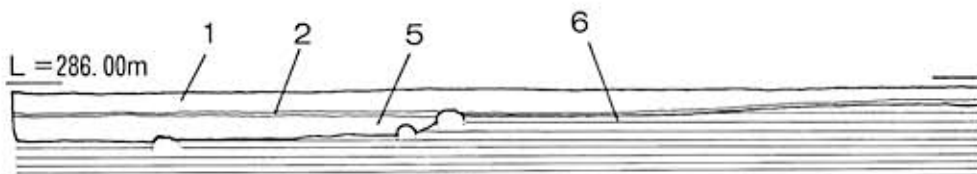


L = 286.30m

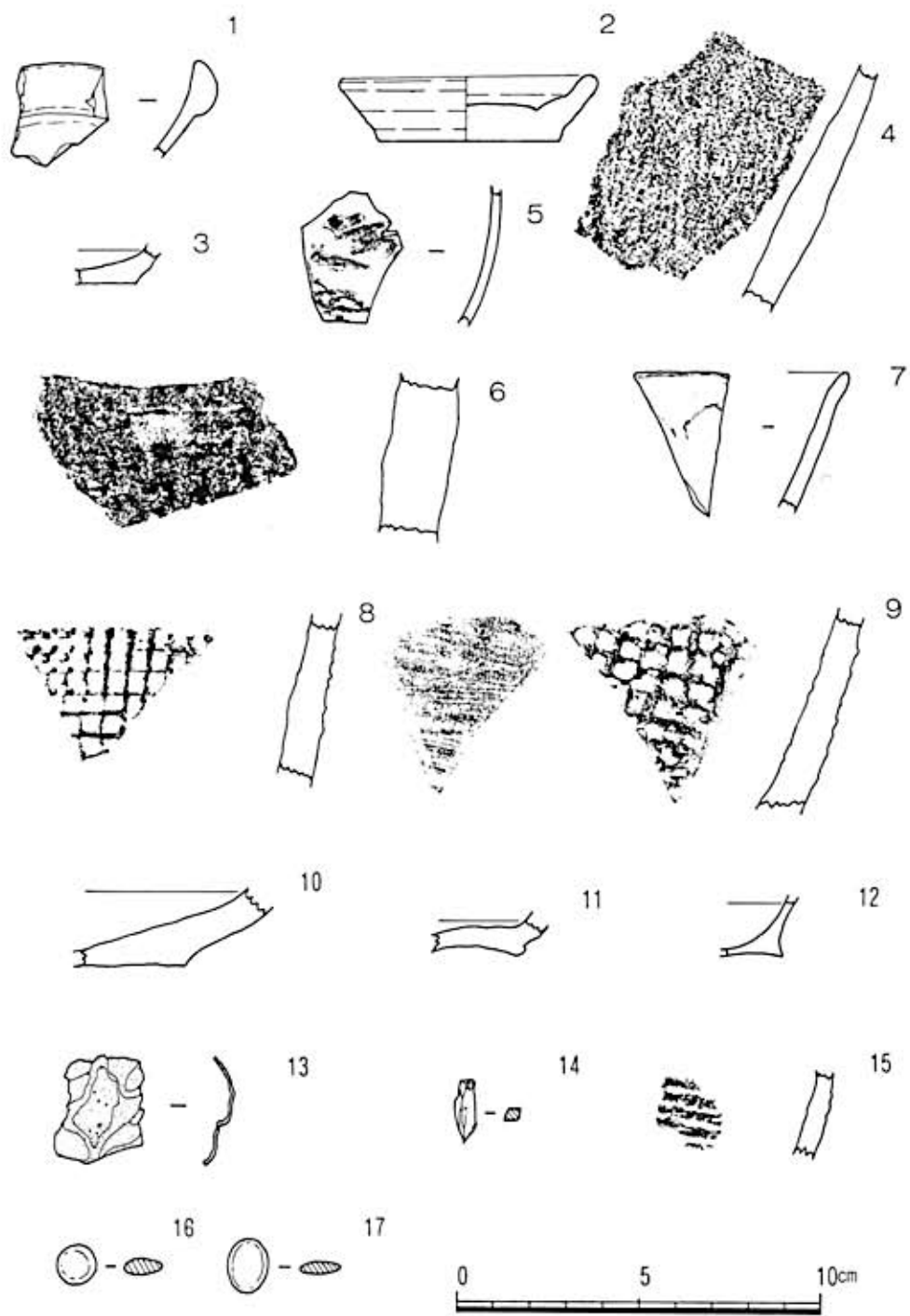


1. 暗褐色土 (水田耕作土、砂粒を含む)
2. 黄褐色土 (水田床土、粘質土、角礫、鉄分を含む)
3. 黒褐色土 (砂、礫を多く含む遺物包含層)
4. 暗茶褐色土 (砂質土、小礫を多く含む)
5. 暗褐色混合土 (大小の礫、木炭小粒、遺物を含む)
6. 黄褐色土 (地山層、粘質土と角礫を含み硬質)

### 第3 トレンチ



第3図 トレンチ平面図、断面図



第4図 出土遺物1  
 1~4 No1トレンチ、5~6 No2トレンチ、7~17 No3トレンチ

## 出土遺物

### 第1トレンチ（1～4）

#### 1. 白磁

口縁部で端部の外側は円く大きく膨らむ。表面はかなり擦れており光沢は失なわれている。色はごく淡い褐色をおびる。胎土は細密で、中に微小な気泡が認められる。器形は鉢形と想定される。

#### 2. 小皿

カワラケと呼ばれる素焼き（土師質）の小皿である。色は茶褐色で胎土、焼成とも良好である。底部にはかすかに糸切りの痕が認められるが、2カ所にヘラで起した痕跡が残る。内面には鉄錆と小礫の大きな塊が付着しており、その上には土師質の土器片も付いている。

#### 3. 小皿

底部の小片である。磨耗が甚しく表面調整は観察不能、淡茶色で胎土はやや荒く、焼成もあまい。このほかにも小皿とみられる小片が2点出土している。

#### 4. 縄文土器

色は赤茶色で、胎土に長石をはじめ砂粒を多く含み、焼成は良好である。内外面とも植物（草木類）によるとみられる仕上げ時の擦過痕が残る。器形としては、かなり大形の深鉢が有力である。

### 第2トレンチ（5～6）

#### 5. 磁器

染付けの碗の部分で、胎土は細密で地色の白も良い。文様にはかなり濃色の紺が使用されており、細片であるため全体の図柄は把握できない。

#### 6. 陶器

焼締めの厚い破片で、大甕の部分とみられる。外面は焦茶色で鈍い光沢がある。内面は暗茶褐色で断面に見られる胎土は暗灰色である。内外面ともヘラ削りのあとナデによる仕上げであるが、大粒の砂が移動した痕が残り、内面には荒い削り痕が残る。

焼成は高い温度による焼締めで硬い仕上がりである。

### 第3トレンチ（7～17）

#### 7. 青磁

碗の口縁部で端部はわずかに外反する。色調はやや淡い緑青色、胎土は細密である。外面には蓮弁文がありやや直線的な弁形の構成となっている。ほか小片一点がある。

#### 8・9. 須恵器

須恵質の2点である。いずれも外面には格子目の叩き文が施されている。内面はヘラ削りのあとがナデによる仕上げとなっている。9には櫛目状の荒い条痕が横方向に残されており、色は8が淡い茶褐色で9は青灰色である。8の胎土はやや荒く焼きもそれほど良くない。9は胎土も細密で焼成も良く硬質である。

#### 10・11・12. 碗・皿

10は碗の底部で赤味をおびた淡茶色で胎土・焼成とも良い。表面は磨耗していて調整の手法は明らかでない。底面にはかすかに糸切りの痕が残る。各所にかすかな煤の付着が認められる。

11は底面の中央部分が盛り上がるタイプの皿であるが、磨耗がはげしい。

12は小型の碗の底部とみられるが、薄手に作られている。胎土・焼成とも良好で表面は滑らかに仕上げている。底部の外縁あたりはシャープに磨き上げられている。

全体が黒く焼けている。ほかに土師質の細片が1点あるが小皿の部分とみられる。

#### 13. 縄文土器

小片であるが胎土・焼成とも良い。横方向に凹線が走っており、表面に細かい縄目の文様がつけられている。

#### 14. 銅片

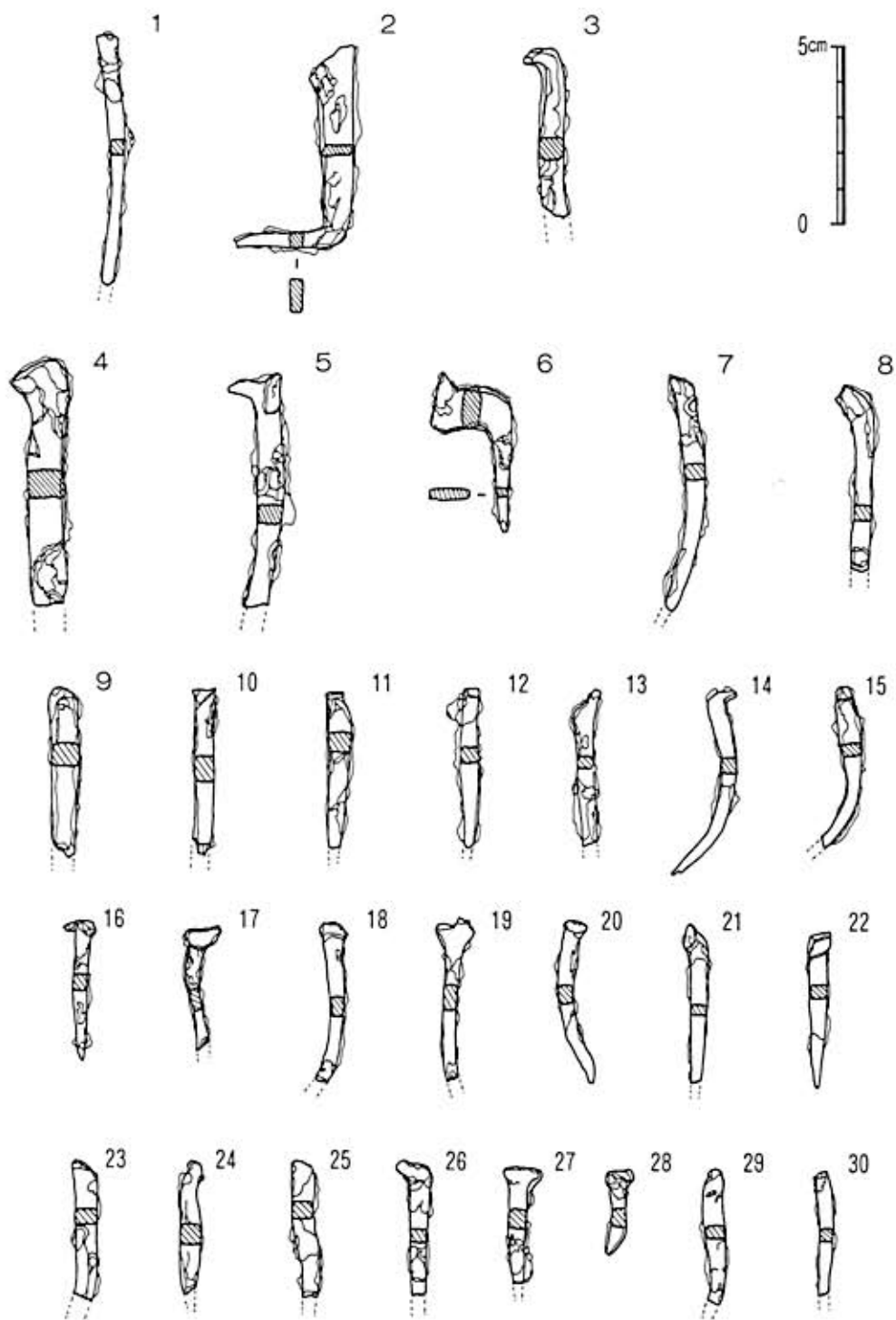
厚さ1mmほどの銅片である。板状であるが不規則に曲っており、表面には無数の凹点がある。溶けて固まった状態とみることができる。全面が緑青に覆われている。

#### 15. 黒曜石片

小片ではあるが楔状の剥片である。石質は良いが土中でかなり揉まれたのか、表面の光沢はほとんど無い。

#### 16・17. 小礫

扁平で表面のよく磨かれた礫で、整った円、楕円形である。古代遺跡で出土することのある小石の類であるが、その性格は明らかにされていない。水的作用によって磨かれた形状と見られるが、河床の礫ではなく、海岸で時間をかけて磨かれた形と見るべきであろう。16は純黒色、17は黒色ではあるが、石質による細く短い線状の斑文が無数にみられる。



第5図 出土遺物2  
 1~3 No 1トレンチ、4~30 No 3トレンチ

### 鉄釘類（1～30）

1～3は第1トレンチ、4～30は第3トレンチよりの出土である。

2と6はL字形の打ち込み金具である。扁平な材料を捩じた形で、基部のタテ方向と先端部のヨコ方向の断面は、逆T字形となっている。

そのほかは大小の釘であるが、7より27までは、頭部を平らに潰したのち、円く巻いた製法によるものである。断面は不揃いではあるが方形、長方形となっている。

何かの建物に使用されていたものとみられ、曲ったもの、頭部の潰れたものがほとんどである。第3トレンチの南側で、水田の基盤となる床土面より下の、整地の埋土のなかよりの出土が大部分であるが、多くは錆が土と小礫を抱いて固め、太い棒状の塊となって出土した。鉄部分の材質は硬質であるが脆くなっており、容易に折れる。



## Ⅳ. まとめ

今回実施された調査は、事業の対象となる区域のなかでは、ごく一部の場所に限り、この地域に埋蔵される文化財について、結論をまとめることはかなり難しいことである。

歴史的遺産の多い三徳山は、12世紀の初頭には「社閣38、坊舎100余軒」と伝えられているように、周辺には多くの社寺が建ち並んでいたものと推測される。

山間の平坦地に乏しい地形のなかで、この地域も何かの形で土地が利用されていたものと見るべきであり、数多く出土した鉄釘類からみても、それなりの建築物の存在したことは確かである。

出土した遺物のなかで、1は13世紀頃の輸入磁器とみられ、2の小皿は漆町、草戸の12世紀後半の出土遺物に共通する点が多い。また6の陶器は備前の大甕とみられ、Ⅱ期後半よりⅢ期中頃（真壁編年）に当てることができる。7の青磁碗は中国竜泉窯の13世紀頃に近い。8と9の須恵質土器については、岡山県の勝間田焼の12世紀後半の製品によく似ている。大まかな見方ではあるが、12世紀より13世紀へかけての遺物が中心となっている。

縄文時代の遺物の出土については、この地域は縄文遺跡の立地する最良の条件を備えた場所であり、その時期の限定はできないが、ここを生活圏としていた縄文人の居たことも事実である。

ここまでの調査結果からみて、この地域には、縄文時代と、平安時代より鎌倉時代にかけての遺跡が存在していたことが明らかになった。

しかしながら、その後の三徳川・海老谷の氾濫や、背後にそびえる比高差150mに及ぶ急斜面の、土石の崩壊による流下堆積も繰返されていたものとみられる。何時の頃か斜面に開かれた水田も、何回かにわたって造り替えられており、遺構の保存されている可能性は、きわめて薄いと判断せざるを得ない。

ただ、遺物は勿論であるが、遺構の一部は残っているかも知れないことも念頭におきながら、これからの事業を進めて行かれることが望まれるところである。

おわりに、出土遺物のなかの陶磁器について、数々のご教示、ご指導を賜りました高槻市埋蔵文化財調査センター主任技師、橋本久和氏には、記して謝意を表します。





海老谷より三徳山を望む、矢印：調査地



海老谷上流域の遠望、南より



調査地近景、東より



第1トレンチ、東より



第3トレンチ、北より



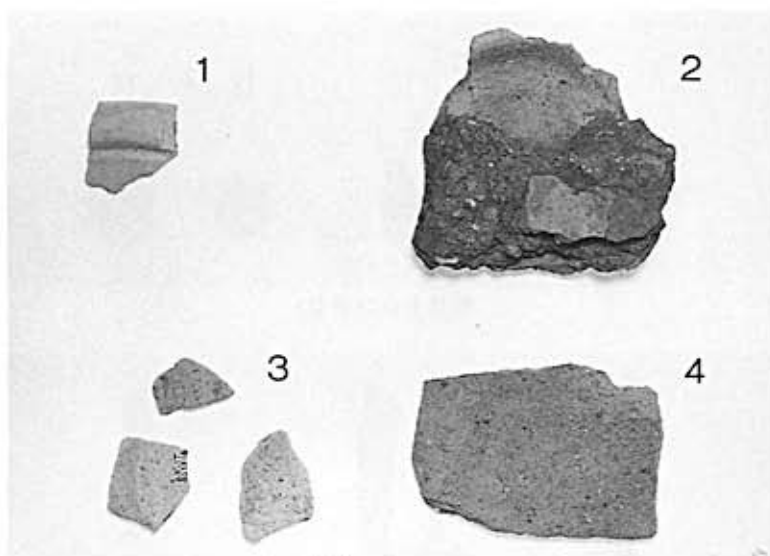
第1トレンチ東端部、北より



第3トレンチ中央部、南より



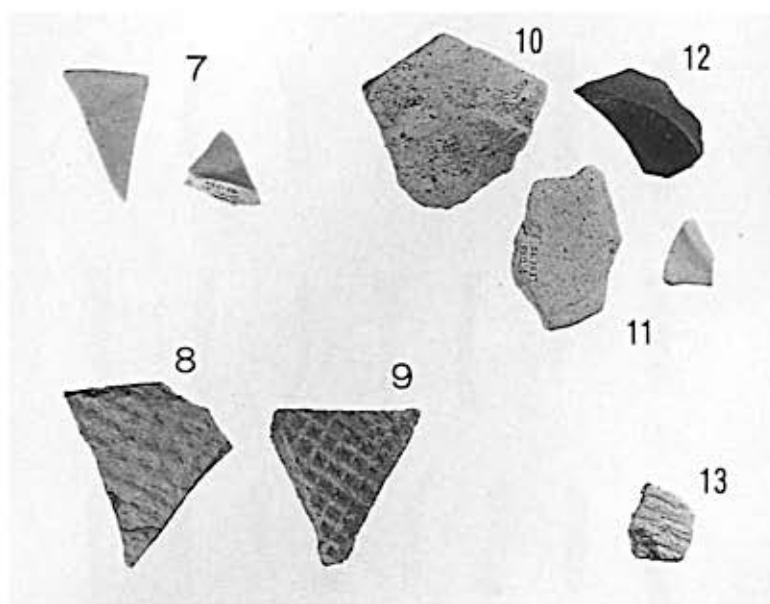
第2トレンチ、東より



出土遺物 第1トレンチ



第2トレンチ



第3トレンチ1



第3トレンチ2



鉄釘類

三朝町文化財調査報告書 第4集  
三徳山海老谷発掘調査報告書

平成5月3日発行

編集 三朝町教育委員会  
発行 鳥取県東伯郡三朝町大瀬999番地の2  
TEL (0858)43-1111  
印刷 矢積印刷(有)  
倉吉市宮川町2丁目36番地